

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	天井 健太
論文担当者	主査 八木 秀司
	副査 垣淵 正男
	副査 戴 毅
学位論文名	Functional recovery and clinical outcome after internal fixation using osteochondral Autologous transplantation for osteochondritis dissecans of the knee (膝離断性骨軟骨炎に対する自家骨軟骨柱移植による内固定後の機能回復と臨床成績)
論文審査の結果の要旨	
<p>膝離断性骨軟骨炎 (OCD) は、軟骨下骨を含む関節軟骨が剥離するスポーツ障害であり、比較的まれな疾患である。OCD の不安定病変に対する内固定術に関して、コンセンサスは得られていない。自家骨軟骨柱移植 (OAT) による内固定後は、良好な臨床成績が報告されているが、スポーツ復帰についての詳細な検討をした報告はほとんどない。申請者は、膝 OCD に対する OAT による内固定後の臨床成績、スポーツ復帰への影響因子など詳細な検討をするために、本研究を行なった。2010 年から 2020 年の期間に関節鏡所見にて不安定な膝 OCD 病変に対して OAT を施行した症例を対象とした。成人発症 OCD、病変が遊離している ICRS grade 4 に対して遊離体摘出、モザイク形成術を施行した症例は除外した。評価項目は、臨床成績として Lysholm スコア、スポーツ活動レベルとして Tegner Activity スケール、およびスポーツ復帰率と復帰までの期間を練習レベルおよび競技レベルに分けて評価した。また復帰時期に影響を与える因子として、病変部位、過去の同部位への手術歴の有無を検討した。研究期間中、34 名の膝 OCD 患者 (37 膝) に対して OAT は実施され、包含/除外基準より合計 24 名の患者 (26 膝) を対象とした。男性 23 名、女性 1 名で、平均年齢は 14.7 歳、病変部位は大腿骨内側顆 (MFC) が 17 膝、大腿骨外側顆 (LFC) が 9 膝であり、平均追跡期間は 27.6 ヶ月であった。平均 Lysholm スコアは、術前 70.0 から術後 96.0 へと有意な改善を認めた。平均 Tegner Activity スケールは、術前 7.0 から術後 6.5 と低下を認めたが、有意差は認めなかった。スポーツ復帰率は、練習復帰で 96.2%、競技復帰で 84.6% であり、平均復帰期間はそれぞれ 5.1 か月と 9.6 か月であった。また復帰に関連する因子として、競技レベルでのスポーツ復帰期間は、LFC 病変では平均 12.9 ヶ月であり、MFC 病変の平均 8.1 ヶ月と比較して有意に復帰までに時間を要した。さらに初回手術群が再手術群よりも競技復帰率が有意に高かった。膝 OCD に対する OAT による内固定後の臨床成績と活動レベル別のスポーツ復帰率は良好であったが、少なからず競技レベルまで復帰できない症例が存在することは認識しておく必要がある。また、LFC での発生や再手術の症例には競技復帰までに時間を要する可能性が示唆された。本研究は、スポーツ活動の継続を希望する膝 OCD 患者に対する OAT による内固定後の臨床成績とスポーツ復帰率を明確にした臨床的に重要な治験を得たものであり、学位に値すると判断した。</p>	